



縦割りを超えて

静岡県副知事 大村 慎一

平成21年4月、私は生まれ育った静岡県に総務部長として赴任しました。これまでの赴任地は皆、第2の故郷となりましたが、今回は偶然にも故郷そのものが赴任地でした。その後新年1月1日付けをもって、副知事の職を拝命しました。

■副知事という仕事

静岡県は人口約380万人、製造品出荷額全国第3位、農林水産物生産品目数全国第1位、一般会計予算約1兆1千億円(平成21年度当初)で日本のほぼ真ん中に位置する雄県です。昨年7月の衆院選直前、全国が注目した知事選で初当選した川勝平太知事の下、こうした基盤を最大限活かした、住んでよし、訪れてよしの「富国・有徳の理想郷“ふじのくに”」の実現を目指して邁進しています。

その中で、副知事は知事を補佐する特別職であり、知事部局職員約5千8百人のまとめ役でもあります(全体約3万8千人)。政策遂行のため、戦略を調整し、組織・職員が円滑に動くよう黒子として支え、県議会ははじめ各界との調整等も担います。知事の代理で県を代表して行事出席することも多々あります。時に高度な判断も求められ、気の抜けない重責ですが、やりがいもあります。

厳しい県政環境下においては、任期に関わらず、1日1日が勝負です。

経歴

昭和62年	4月	自治省採用
昭和62年	7月	鳥取県地方課
平成2年	6月	自治省財政局地方債課
平成4年	4月	札幌市企画調整局調整課長
平成6年	4月	岐阜県企画部企画調整課長
平成7年	8月	同 総務部財政課長
平成10年	4月	自治省税務局府県税課課長補佐
平成10年	7月	内閣官房副長官秘書官
平成12年	7月	自治省財政局財政課課長補佐
平成13年	1月	総務省自治財政局財政課課長補佐
平成13年	4月	同 自治財政局調整課課長補佐
平成14年	1月	同 自治財政局調整課理事官
平成14年	4月	北九州市財政局長
平成17年	4月	総務省大臣官房企画課企画官
平成18年	7月	同 大臣官房政策評価広報課広報室長
平成20年	7月	同 自治税務局税務管理官
平成21年	4月	静岡県総務部長
平成22年	1月	現職

研究職の仕事も経験できるでしょう。縦横に行政経験をこれだけ積むことができる職場はそうありません。制度の立案と現場での運用実感を両方体験することで、この国のありようについて、総合的な視座を持つ行政官を目指すことができるのです。

また、官庁訪問当時の最後の省庁選択の決め手は、国の将来像＝地域分権や仕事の考え方が筋道立っているだけでなく、面接した職員(先輩)の誰もが明るく意欲的で、要は“一緒に仕事をして楽しそう(＝触発される)”であったことでした。その印象は今も全く変わりません。これは就職に際して実は大変に重要な点です。総務省は、様々な場所、局面での実務経験と尊敬できる人との交わりを通じて、自らを鍛えることができる類稀な人生の道場でもあるのです。

道場の門は開かれています。青雲の志を持つ、意欲的な皆さんの訪問を期待しています。



経歴

平成8年	4月	郵政省採用
	7月	郵政省放送行政局衛星放送課企画係
平成10年	7月	英国留学(ロンドン大学)
平成11年	7月	豊川郵便局郵便課長
平成12年	7月	郵政省電気通信局総務課総括係長
	(平成13年1月以降)	総務省総合通信基盤局総務課総括係長
平成14年	8月	内閣府総合規制改革会議事務局室長補佐
	(平成16年4月以降)	同 規制改革・民間開放推進室参事官補佐
平成16年	7月	総務省総合通信基盤局電気通信事業部料金サービス課課長補佐
平成19年	6月	現職

「触媒」としての役割を果たすために 一あらゆる角度から日本の在り方を考えることのできるという武器

経済協力開発機構(OECD)日本政府代表部一等書記官 片桐 義博

私が現在アタッシュエ(各省から派遣された各専門分野の担当)として勤務している経済協力開発機構(OECD)日本政府代表部は、OECDに置かれた我が国の「出島」です。通常の大使館が任国の情報収集等を主な仕事とするのに対し、我々の仕事は、東京からの出張者とともに日本政府の代表としてOECDの会議に参加したり、東京とOECD事務局との間に立って橋渡しをしたりすることです。

OECDには、大使レベルの理事会を筆頭に、防衛を除く各分野に対応した委員会があり、総務省から出向している私は、情報・コンピュータ・通信政策委員会、公共ガバナンス委員会、規制政策委員会を担当しています。

OECDの場において、我々のミッションは2つです。1つは日本のプレゼンスを高めること。OECDは30カ国で構成されていますが、ほとんどの国は欧州諸国かアングロサクソン諸国で、その他の国は日本、韓国、トルコ、メキシコの4カ国だけ。そのような中では、黙っていると議論が欧米の話に終始し、我が国が蚊帳の外に置かれてしまいます。このため、OECD事務局に足繁く通ったり、会議中は積極的に発言しつつ日本の状況も紹介したり、休憩中やカクテルなどで各国代表と話まったり…ととにかくビジビリティを上げて各国から認識してもらうよう努めています。

もう1つは、OECDをツールとして活用す

ることです。特に情報通信政策は、インターネットの普及にとまないグローバルな対応が求められるケースが増えており、国際協調が重要視される分野です。ネットにおける青少年保護策や情報通信技術を使った環境保護への取り組みなどは日本だけで政策を進めても効果は限定的ですので、国際的なコンセンサス作りを進めていく必要があります。その点OECDは、いわゆる「先進国クラブ」で、比較的思考の近い国から成る組織なので、日本の目指す政策に近い形でコンセンサスを得やすいという特徴があります。つまりOECDは、日本が政策の国際展開を進めるための橋頭堡を築く場として有効なのです。

OECD日本政府代表部での仕事の醍醐味は、まさにここにあります。我々が「触媒」となって、日本にとって望ましいフレームワークをOECDの場でうまく形にしていくのです。その際重要なことは、触媒である我々自身が日本の現状を多角的に認識し、どう動かすべきか明確なビジョンを持つことです。この点で、国・地方の制度の企画立案の現場、情報通信という産業の現場という持ち、あらゆる角度から日本を考えた政策を実行する機会に恵まれる総務省での経験は、強力な武器となります。さらに、私自身は変化の著しい情報通信政策に長く関わってきましたが、その中で鍛えられたスピード感や思考の柔軟性は、多様

な文化背景をもつ国々の代表と渡り合う中で非常に役立っています。

もちろん、海外勤務の醍醐味は仕事ばかりではありません。パリの日々の生活も、些細なことの中に様々な発見があり刺激です。また、フランスは「オン」と「オフ」を上手に使い分けている国ですので、私自身も家族との時間を十分に持ち、しっかり楽しんでます。

あらゆる角度から日本の在り方を考え、現場感覚に裏打ちされた判断力で国内外に活躍の場を広げること望む人には総務省は非常にやりがいのある職場です。熱意にあふれた皆さんと一緒に働くことができるのを楽しみにしています。

